

15歳〜39歳を思春期・若年成人(Adolescent and Young Adult)の英語の頭文字を取って「AYA世代」と呼ぶ。この世代のがん患者は、就学や就労、結婚や妊娠など人生の大きな節目を迎える世代であり、治療との両立が求められる。特に



AYA世代への支援や診療体制について話す岩瀬教授

AYA世代 体制整備へ

治療後の人生に希望を

つた抗がん剤治療も通院で対応できるようになってきています。仕事や学校と両立できるように治療法も進んできています。

生殖機能を温存
— 20代、30代のがん患者の8割が女性です。
15歳未満の小児がんでは、白血病やリンパ腫などの血液のがんが多く、男女比はほぼ同じです。20代、30代になると、女性特有の子宮頸がんをはじめ、女性に多い乳がんや甲状腺がんが増えていることで、割合が高くなっています。

— がん治療は生殖機能への影響が大きい。
がん治療で妊育性(妊娠する能力)が失われる可能性があります。妊育を希望する方には、精子や卵子・卵巣を凍結保存し、がん治療後に人工授精や体外受精に用いることや、卵巣を移植して戻す「妊育性温存療法」があります。男性における精子の凍結保存は以前から行われていました。女性の卵子や卵巣組織の凍結保存の技術は、ここ10年で格段に進歩しました。これまで県内で対応できなかった卵巣組織についても今年から当院で体制が整いました。

— AYA世代における問題は、国立がん研究センターによると、2017年に新たにがんと診断された患者約98万人のうち、AYA世代は約3%に当たる約2万9千人と少ないため、これまで実態把握や支援の手があまり回っていませんでした。
AYA世代に限りませんが、がん治療では、仕事の長期休暇や定期的な通院による休日取得が必要になります。AYA世代は就学している方も多く、長期の休みによる勉強の遅れをどう取り戻していくかが問題です。結婚や妊娠への影響も懸念されます。
— AYA世代への支援体制は、

以前は仕事や学校を辞めるしかない状況でしたが、今は働きながら、学びながらがん治療ができるように、企業や学校の理解も深まってきました。また、長期の入院が必要だ

がん治療は生殖機能への影響が大きい。妊育を希望する患者に適切な情報提供をする「県がん生殖医療ネットワーク」の事務局となっている群馬大医学部附属病院産科婦人科の岩瀬明教授に、患者の支援や診療体制について聞いた。

理解や支援進む

— 県がん生殖医療ネットワークの活動は、17年に設立され、がん患者をサポートするための啓発活動を進めています。治療開始までの短い期間でスムーズに妊育性温存療法の相談や実

施ができるよう、県内施設の情報を公開し、紹介しています。年に1回、妊育性に關する問題について、医療関係者向けの講演会を開いてきました。今年から市民向けの公開講座を始める予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。
— 今年度、県がん対策推進協議会に「がん生殖医療検討部会」が新設されます。県がん対策推進条例では、AYA世代の長期フォローアップ体制の整備も掲げられています。行政が関わること

必要な助成制度を設け、啓発活動への協力体制も進んでいくことを期待しています。
— AYA世代のがん患者や家族にメッセージを。
企業や学校はがん治療への理解や支援が進んできています。将来妊娠や出産に不安もあると思いますが、妊育性温存療法や手術方法の進歩で治療後に子どもを授かる方も増えています。家族のサポートも非常に重要です。治療後の長い人生に向け、患者や家族の希望がかなえられるよう力になりたいです。

凍結精子を用いた人工授精・体外受精

凍結卵子を用いた体外受精

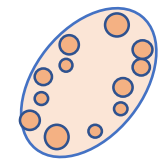
凍結卵巣の腹腔内への移植

凍結受精卵の胚移植

原疾患への治療



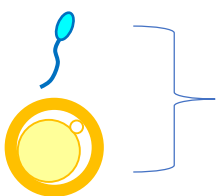
精子凍結



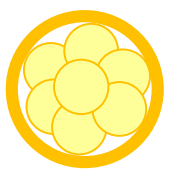
卵巣凍結



卵子凍結



体外受精



受精卵凍結

妊育性温存治療のイメージ

悪性腫瘍治療前もしくは治療中

